
運命の輪

ソルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の輪

【Nコード】

N1348C

【作者名】

ソルト

【あらすじ】

主人公陽菜はどこにでもいる普通の小学6年生……だっ
た。あの日が来るまでは……あの日のある出来事を境に陽菜の人生は180度変わってしまうのであった。

第1話【序章】（前書き）

この小説には多少のグロテスクな表現が含まれている可能性があります。
ます。

苦手な方は読む事を余りお勧めしません。

また内容にいじめが含まれていますのでこちらもご注意ください。

第1話【序章】

突然だけど私は陽菜、なんらかわりのない小学6年生

これでも一応学級委員やっててクラスでも人気があるほう。

そして私のクラスは私のグループと綾ちゃんのグループがあったんだ別にいざこざもなく【いじめ】なんて正直一線引いて考えてたでも誰にでも突然起こるんだって思ったんだ。

ある日の帰り道ここから悲劇が始まった……

私は同じグループの2人と下校していた

そんな時2人がたわいもない話をはじめた

「さいきんひまだよねなんかおもしろいことない？」

「まったくだよねえ……あれやちゃおうかあの【GAME】誰でやるのかな」

「あれはちょっとやばくないまあ少しくらいなら利奈でよくない？」

話が途切れた時私は間髪いれずに「【GAME】ってなに」と聞いた。

けどその時は ただの遊び という一言で終わってしまった、何のことかよく分からなかったけどこれ以上深くはきかなかった
だってまさか、この【GAME】が虐めの事だ何て知ってるはずもなかったから

そんな事を考えながら雪花と桜と別れた。

「まあ少しくらいなら平気だよ利奈なら気弱だし何より【PLAY
ER】にびったりだしね……じゃあ早速明日から フッフ・
・」

次の日から今まで一線引いていた【いじめ】が私の身近になってい
た。

そしてその余波は、私に牙をむいて襲い掛かってくるなんてこのと
きの私には、予想もできなかった。

第二話【RLAYER】（前書き）

グロテスクな表現が含まれているのでご注意ください

また虐めが内容に含まれていますのでご注意ください

第二話【RLAYER】

次の日既に悲劇は始まっていた。

私は何も知らずに席に付いた。

そして利奈がいつものようにクラスに入って「おはよう〜」というしかしクラスの誰も返事をしなかった。

その後個人個人にあいさつをしたが全く返事はない、完全に【無視】されていた

少しの間そこで立ち尽くし我に帰ってうつむきながら自分の席に向かった。

私は小さな声で「おはよう」と声をかけると笑顔で「おはよ〜」って返してくれた。

と思ったすぐ後後ろでドスンという鈍いをとがして私が振り向くと利奈の机の上に「死ぬ」だとか「呪い」だとか「消える」だとか「さっさと逝っちまえうざいんだよ」とかそれはもう酷かった。

私は呆然としてしまった。

利奈は大粒の涙をポロポロこぼしながらペタンと座り込んだ

このとき昨日の【GAME】が【いじめ】の事だっけ気が付いたんだ

それから数分間教室には泣き声だけが響いた。

「ガラガラ……」

先生が入って

「コラー利奈何してるさつさと席に付かんか!」
何も知らないからそんな事が言えるんだと私は思った、いやそう思
いたかった。

授業が始まる

そんな中利奈の足元には折りたたまれた紙が投げつけられていた。
1まいをひろって読むと中には紙いっぱい「死ね」、「消えろ」
ともう数え切れないほど書かれていた。

怒りの感情が込み上げてきて、鋭い目つきで雪花を睨みつける。

しかし雪花はまるで「私は全く関係有りませんよ」といわんばかりに
すましたかおでこちらを見る。

私は放課後に2人を呼び出した。

「何?こんな所に呼び出して?」

「はやくようけんすませてよこっちも忙しいんだから」

2人は何の関係もないかのような口調でいつてきた

「何?じゃないでしょあなた達がやってる事どういうことか分かつ
てるの?昨日の【GAME】って虐めの事でしょ!!ふざけないで
さつさとこんな遊び止めて」

すると二人は何かを話し始めた。

数分後……

「分かったよもう利奈を【GAME】の【PLAYER】にするの
やめるよだからもう帰っていいでしょじゃあねフッフ…」

私は二人を帰した

でもね、今思えばこんなにあっさりいじめが終る分けなかったんだよね

こんなに簡単に…

次の日もつ利奈は虐められてはいなかった

そういつもと同じ日常に戻ったんだ。

しかしこれも長く続きはしなかった。

それは同時に【GAME】の【ターゲット】が私になる事を意味していた…。

第3話「ターゲット」(前書き)

内容に虐めが含まれていますのでご了承ください

第3話【ターゲット】

利奈虐められなくなって3日後、私はいつもと変わらずクラスに入った。
つた。

そこで私の手からするりとかばんが抜け床に落とした。
なぜなら「もう陽菜は死にました」といわんばかりに机の上に花瓶に入った菊の花が置かれていた。

少しして我に帰ればばんを拾ってそつと花瓶をロッカーに入れる。

自分の席のところでは半ベそかきながら「誰？何のためにこんなことしたのふざけないで！！ねえふざけないでよ」

思わず発狂してしまった、そして雪花のかたを叩いた

「キヤー誰かが私の肩叩いてきたー幽霊だ！！怖ーい誰かここにいろよ！！」

凄くわざとらしくクラスに響く甲高い声で叫んだ

すると何人かも便乗して同じ様な事を言う。

私は此処に居るのに……生きてるのに。

「じゃあさあ幽霊退治しようか…幽霊はさつさと消した方がいいでしょ」

桜が不気味な笑みを浮かべて、こちらを見たと同時に全身に鋭い痛みが走った。

痛みのせいか凄い吐き気がして朝食を全部吐くかと思った。

かすれた意識も痛みですぐにもどり、ヨロヨロとふらついて「ゲホつゲホ……」咳き込んでも暴力は続いた

2回目は背中とおなかを同時に挟むようにして蹴られた。

今度は朝食どころではなく胃ごと吐くかと思うほどの吐き気に襲われ床に倒れるそれでも尚、暴力は続けられた。

最初はいたかったのが分かったがもうなんか感覚がないただ体が熱いだけ。

声を出す気力も残ってなかった

このとき私は気が付いたんだ

【GAME】は終わってなかったただ【PLAYER】が利奈から私になっただけだったって……。

「あれ〜？おかしいなあ手ごたえは有るんだけどなあ」
桜の言葉に数人がクスクス笑った。

私は重い体を引きずりながら自分の席にやっとの思いでたどり着いて椅子にもたれかかる。

先生が入ってきて授業が始まる、すると利奈のときと同じで紙がたくさん飛んで来た。

中なんて見なくても分かるそう思って全部拾ってポケットに詰め込んだ。

先生からはなにも言われない、きっと授業をちゃんと聞いているように見えるんだろう。

たしかにわたしは授業を聞いていた、いや聞いているふりをしていたんだ。

授業なんて聞いてられる状況じゃなかった。

体中が「痛い痛い」って悲鳴上げていたから。

授業が終わりクラブの活動に参加すると

「あれ〜金管って6年7人しかいないのになんで8にんもいるのよ」
【クラブなんかくんなよ

家への玄関の前で手鏡見ながら無理やり笑顔を作った。

幸いまだちゃんとした笑顔が作れる、じぶん「まだ笑えるねがなばれるね」って言い聞かせて玄関を開ける。

「だっだいま〜」いつものように無理やり元気な声で言った。そういうとすぐに2階の自分の部屋に上がって着替えた。服をぬぐだけで痛かった鏡で全身を見ると青あざだらけだった1日でこんなになるなんて…

夕食には私が大好きな母手作りシナモンロールがあった。

他の物を食べ終えてシナモンロールに取り掛かろうとした瞬間、今日の出来事やよみがえってきて凄いい吐き気に襲われ胃の中の【何か】を吐きそうになった。

私はこっさりばれないようにシナモンロールを残して夕食を終えた。幸い母と父は話の中で気が付かなかった。

その後風呂に入ると湯船に使った途端ものすごく体中がひりひりして思わず「いたい！！痛い痛い痛い」って声を上げた。

これから毎日こんなのが続くと思うと嫌になったけどまた鏡を見ながら「まだ笑えるね」って言い聞かせてそんな気持ちをかき消した。

第4話【PRIDE】（前書き）

グロテスクな表現が含まれているので（軽め）ご注意ください。

第4話【PRIDE】

次の日の朝食の時お母さんに「学校楽しい？」って聞かれて「うん」って無理やり答えてけどまたもの凄い吐き気に襲われる。

それでも胃が、受け付けてくれない朝食を箸で無理やり押し込んで朝食を終えた。

いつもは一緒に登校している、桜と雪花居るはずもない。

一人で学校へ向かう間も時折吐き気がして、胃から来る【なにか】をひっしでこらえる。「うっ…」ってなる事も有ったけどそれでも堪えて学校までいった。

クラスの扉の前で立ち止まった。クラスの扉を開けるのが凄く怖かった。

この後どんな事があるかと思うと足がすくんでよけいに入れなかった。

覚悟を決めて扉を開けると、クラス全員の冷ややかな視線が突き刺さる

そして私の席を見ると昨日と同じ様に花瓶に入った菊の花が置いてあった。

私はそれを無言でどかして席に付く。

すると突然後ろから思い切り花瓶の中の水をかけられた。

クラスの中がしゅんと、静まり返った。

多分思いもしない行動だったんだと思う、でも私からすれば察しがついた。

どうせ花瓶に対しての反応がなかったからいらついでやったんだろう。

それでも私は耐えた、絶対に泣かないって決めていたからそれが唯一つの虐めに対する抵抗だった。

同情の目で利奈がこちらを見ている。

あのあと「有り難う何か有ったら絶対私を守るからね」って言うってたけどやっぱり人って口だけだなんて思った。

後ろには人権標語ポスターが張つてある。何が「虐め絶対ダメ」「差別反対」雪花にいたっては「いじめ差別絶対ダメ虐めは人を傷つける行為です」なんて書いてるくせに……。

そして休み時間、暴力はさらに酷くなる。

黒板に押し付けられ黒板けし投げつける、いくら咳き込んだ所で何も変わらない、いや逆に酷くなった。

「おい桜ちよつと筆箱とって 此処にある【ゴミ】じゃまだからさあ」

雪花は筆箱の中からカッターと取り出した。

「ちよ…やめて何するの…グッ…」

抵抗する私のみぞおちを桜が思い切り殴りつけた。

「ウ…ウえ…ゲッホゲホ」

体感した事のないもの凄い吐き気に襲われその場で朝食全部を嘔吐した。

「うわこいつ吐いたよ汚ねえじゃあさつそと消えな【人間のクズ】」
色々な所を切りつけられる手や足、手首、顔…手首はまるでリストカットしたかのようにだった。

血が溢れる私はそれを必死で抑えて止めようとした。

でも全然止まらない、自分の席にタオルがあることを思い出しふらふら歩いて自分の席までいった所で私は意識を失いその場に倒れた…。

周りは血の海だった、その後はもう覚えていない。

気が付くと私は保健室のベッドの上にいた。

カーテンのむこうでは話し声がする

「血はとまっているので時期に目を覚ますと思いますですが万が一のことがあつたらすぐに病院に運びますので承知してください」

誰かと電話で話しているみたいでももう意識戻っている。ベッドから起き上がりカーテンを開ける。

先生が振り向き

「目覚めたのねでも何であんなことしたの！！あなたがしたことは立派な自殺よ」

ちがう自分でやったんじゃない、虐めの中でカッターで切られたんだ…でもいえるわけじゃない、私の親は【うちの子は絶対虐められない】って思っているのに「私虐められています」なんて…力はないけど【PRIDE】ぐらい私にだってあるから。

「ちがう…これはい…」

やっぱり【PRIDE】許さなかった途中まで言いかけてそのままのみこんでしまった。

第4話【PRIDE】（後書き）

この話は半分フィクションで半分がノンフィクションです。
この言葉の意味は皆さんの想像にお任せします

第5話【出会い】

変な意地張って本当のことをいえなかった自分がバカバカしかった。

「とにかく今日は帰りなさいゆっくり休んで……ね」

「はい……」

うつむいたまま返事をしてかばんを手に下げ学校を後にした。

手足にはカッター出来られた生々しい傷が十数ヶ所残されていた。

悲しむと怒りが込み上げてきて、このままだと気がどうかなっちらうかもしれないって思うくらい耐える限界に近づいていた。

家に着き玄関を開けてはいると目の前に母がいた。

「何で手首なんか…自殺なんかしようとしたの」

始めてみた母の涙、私のことをさぞかわいいんだろうでもなんて何にも分かってない、私のことも少しはわかって欲しかった。

「な…んでもない」

また嘘をついた【絶対虐められない】なんて思ってるお母さんにいえるわけないよ。

そんなのいえるわけ……

「なんでもないなんて事ないでしょ 何もなかったら自殺なんかしないでしょ ねえ答えなさいよ!!」

「なんでもないものはなんでもないんだよほつといてよ」

凄い勢いで自分の部屋に入ってドアを閉める。

自分の【PRIDE】っていう意地でお母さんにも先生にも嘘を付いた事がすっごく悔しかった。

その後夕食なんか食べられそうになかった、今までとは違いずっと吐き気に襲われている。

吐けばすっきりするんだろうなって思ってたのどに指れて無理やり吐かせようとしても吐く物がなかった。でる物は胃液だけそれと前以上も吐き気だけだった。

吐きたくてもはけないって一番辛いと思う、吐いちゃえばすつきりするのに……

その夜みんなが寝静まった頃私はまるで夢遊病患者のように、ふらふらとくつもはずかに外へと歩いていった。

変質者、不審者なんかドンとこい！見たいな感じでも本当にどうでも良かった。

生きてる事が辛く感じた、いつそのこと他殺でも何でもいいから死にたかった。

「どん」と誰かとぶつかって相手が倒れた。

すぐに「大丈夫ですか」って声をかけて起こした

「有り難う御座います」そういつて歩き始めたすぐ躓いて転んだ、良く見ると着ている服はボロボロになっていた

「ひよっとしてあなた目見えてないの？…

第5話【出会い】（後書き）

これはフィクションでありノンフィクションです
意味は読者の皆さんにお任せいたします。

第6話【勇氣】

その声に小さくコクンとうなずいた。

私はそのままその子を近くの公園まで連れて行ってブランコの座らせた。

あたりは街灯で照らされていて明るかった

「有り難う私の名前は綾香…よろしくね…」

小さな声でお礼を言われちよつと恥ずかしかつたでも私は話を進めた。

「あ、あのお…何でこんな夜中に一人であんな所歩いてるの？お母さんとかは心配しないのお？」

と初対面で緊張しながらきいてる私も一人で真夜中に町外れの道を徘徊していたけど、私はもう生きる事が辛くて…嫌になってたわけがこの子とは綾香さんとは訳が違うと思つたから。

「私には…両親がいないの小さい頃に事故で…そのせいで私も目が見えなくなつた…だから」

私ははつととしてすぐに言葉を切り返した

「ごめん…悪い事聞いちゃつたね私はね学校で虐められてるの…」
詳しい事は言わなかつた。というより恥ずかしくてそんな事いえないかつたでも綾香はそんな私を受け入れたんだ。

「虐められてる…いいよ全部いつちやつて全部私が聞いてあげるからさそうすれば少しは…ね」

半信半疑だつたまさか初対面の人にこんな子といわれるなんて思わなかつた。

そしたら涙がせきを切つたかのように溢れてきた。

何でだろ…なにか心の引つ掛かりが取れたみたいに安心しきつたのかな多分。

そして私は全部話した。

花瓶が置かれていたことも殴られたり蹴られたり給食にゴミ入れられたり、味噌汁には牛乳入れられて残飯をかけられたり、カッターで全身を切られたり通りかかる事に悪口をいわれて人間として扱われていなかった事も全部全部話した。

綾香もそれを全部受け止めてくれて一緒に泣いてくれた。

とてもすつきりしたし嬉しかった。

そして最後に私に「頑張れ陽菜絶対負けないよ絶対頑張れるよ」
っていつてくれた。

この言葉はすつごく私の心に響いて生きていく気力が生まれた。

生きてればいい事が絶対ある、そんな感じがした、とっても勇気付けられて虐めになんか負けないって思わせてくれた。

第6話【勇気】（後書き）

この小説は半分はフィクションですが半分は現実で起こったノンフィクションです

諸事情

このたびこちらの諸事情により（PCの変更）によりこの小説を終わりにいたします

ですが全く同じものを再度作成いたしますので、今後ともに私ソルトとこの小説運命の輪をよろしくお願いいたします新しい小説の名前は【運命の輪】です。

よろしくおねがいします（作者名はソルト です）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1348c/>

運命の輪

2010年10月16日05時39分発行